

吉田修一『ランドマーク』から読む都市空間

法政大学大学院政策創造研究科

増淵 敏之

要旨

小説などの文芸作品は都市空間の変容を見るために有用なテキストといえる。確かにフィクションであるが故に、信憑性などの面で精査を加えなければならないことは自明であるが、従来の都市分析からはみ出した論点をそこに散見することもできる。本稿では吉田修一の小説「ランドマーク」をテキストとして取り上げ、さいたま新都心の開発によるさいたま市旧大宮地区の都市変容を見て

いく。その背景には1980年代後半からの国の首都圏再開発計画の存在がある。果たしてこの開発計画は当該地区に何をもたらし、何を失わせたのかをテキスト分析を通じて論じていく。

キーワード：都市空間、テキスト分析、ランドマーク、再開発、都市の変容

はじめに

1960年代の国内での都市論の本格的な議論は、政治経済学視点からなされたものが主流であった。それは端的にいえば高度経済成長下での都市問題の再考という視点からのものであった。羽仁五郎(1968)は、「国家と結びついた独占資本が自治的共同体としての都市の成立を妨げている」(若林, 2005)とし、吉本隆明が1969年に発刊した『都市』では、「都市問題とは経済成長の諸矛盾が生み出した問題であると同時に、資本と国家という支配的な権力に抗していかにして都市を自治と自立の場にできるかを巡る問題」(同上)と述べた。

しかし1980年代に入って文化という概念が都市論の中に介入してくる。これは現在でいうカルチュラル・スタディーズ的¹⁾なアプローチともいえるが、同時にテキスト論的アプローチと読みかえることもできる。例えば前田愛(1982)は、「BERLIN1888ー舞姫」、「こどもたちの時間ーたけくらべ」、「劇場としての浅草ー浅草紅団」他において、文学作品をテキスト論的に読み取るというアプローチを試みられている。彼は「有用性の機軸ー行政・生産・交通・交換ーを中心に、都市を構成している個々の要素を分割し、統合していく、それまでの分析手法に対して、むしろ有用性のネットワークからはみだす部分、そこに生きる人間の気分や欲望の感光板としてあらわれる都市の深層的な部分を記号論的に解釈する方法を提起した」(前田, 1982)と述べ、あくまでも記号論的な視点を強調している。しかし後の都市論には大きな

影響を与えた²⁾といえる。

陣内秀信(1985)は、江戸から東京への移行を建築、都市景観論的な枠組みで捉え、徹底したフィールドワークを通じて「東京＝都市」の変容を明らかにした。「明治の初年から、それまでの歩行を主体とした狭い道路が拡張されたり、封建都市特有の自閉装置として節々に設けられていた枴形や曲の手が撤去されたとはいえ、全体として見れば東京はむしろ、しっかりと組み立てられた江戸の都市構造を受け継ぎ、その上に乗っかりながら近代の都市形成を行なったといえる」(陣内, 1985)とし、都市を建築論からの視点で読み取るという作業を行った。

また吉見俊哉(1987)は、浅草、銀座、新宿、渋谷の都市空間の対比により、「東京＝都市」を明らかにしていく。「都市とそこに生きる人々との関係を、〈テキスト〉と〈読者／登場人物〉の関係としてよりも、むしろ〈上演 performance〉と〈観客／演者＝役〉の関係として把握するように促す」(吉見, 1987)とし、彼はそれを「上演論的パースペクティブ」と呼んだ。

吉見俊也は都市論の中でのテキスト論的都市論のアプローチを4つに分類している。(1)主として文学研究の側から試みられてきたアプローチで、都市＝テキストを文学作品＝テキストの分析を通し描き出していこうとするもの。(2)直接都市を自分の足で歩いて回り、その体験を言葉にしていくことを通じて都市＝テキストを讀んでいこうとする、ルポライターや作家、写真家によるアプローチ。(3)主として建築の領域で展開されているも

1) 文化、経済、社会などの知見を領域横断的に応用しながら、サブカルチャーなどを手がかりにして産業社会の文化と政治に関わる状況分析の学問的枠組み、20世紀後半のイギリスが震源地となって普及した。

2) テキスト分析の手法としては、テキスト論、記号論など新しく興った文学理論を積極的に研究に取り入れていった。その手法を平易に説明したものに前田(1993)がある。

ので、都市の建物や街区の空間構成、あるいは壁面形態をテキストとして記号論的分析の対象としていく。(4) 主に社会史の領域で展開されているアプローチで、都市を、民衆の群れ集う祝祭的な空間として捉え、そこにおける結集化の契機を探っていくもの、である。(吉見俊也, 1987, 7)

しかし吉見も述べているように上記のアプローチのどれかひとつを選択するのではなく、それらが絡まりあい、複合していくことが多い。またそれ以外のアプローチも当然あり得るだろう。同様なアプローチを取ったものとしては1999年の和田博文『テキストのモダン都市』がある。こちらの方は昭和初期、東京の住宅、交通機関、デパート、カフェなどの空間を文学作品やそれ以外の記述を読み解きながら、その時代の都市空間を明らかにしていこうとするものである。写真も効果的に使われ、都市論としても充分、読み応えのある論文に仕上がっている。

また今橋映子(1993)は、1800年代のパリのボヘミアンの生活から始まって、日本人が芸術を学ぶために頻繁に行くようになる1900年代前半のパリの都市空間をやはりさまざまな記述を基に分析していく。オスマンの都市計画によって現在のパリの基盤が作られるのだが、W.ベンヤミンの拘ったパサージュもそれによって多くは姿を消し、新しい芸術の都への変貌、そして芸術家同士のネットワーク形成など興味深い論文といえよう。

地理学の分野では杉浦芳夫(1992, 1995)によって文学作品をテキストにした空間の読み取りが行われるようになった。前者は文学作品を読み込むことによって、従来からの地理学の理論の実証的検証の側面を持っている。後者は杉浦の編著になるものだが、国木田独步、長塚節、松本清張などの文学作品を通じての「場所」に関する議論を纏めたものである³⁾。

本稿で扱う吉田修一は都市を描く作家としての側面を持っている。例えば芥川賞受賞作になった『パークライフ』では日比谷公園や駒沢界限、『東京湾景』では品川やお台場、『長崎乱楽坂』では長崎など、様々な都市空間がそこに存在している。『ランドマーク』もそういう特定の都市空間を設定し、そこにおいての人々の物語を展開する。

吉田修一は1968年、長崎に生まれた。法政大学卒業後、スイミングスクールなどのアルバイトを経て、1997

年に『最後の息子』で文学界新人賞を受賞して文壇にデビューする。2002年には『パレード』で山本周五郎賞、都市における若者の生活を独自の視点で描き、女性の性格描写にも個性が溢れているという評価が高い。

何故、小説の舞台に大宮を選んだのかという問いに吉田はこう答えている。理由は「大宮の地図を見ていたら空き地があったので、ビルを描き入れたくなったんです」(asahi.com『マイタウンさいたま』)。

2. 『ランドマーク』概要

『ランドマーク』の舞台はさいたま市大宮区⁴⁾である(図1)。いわゆるさいたま新都心が中心になる。旧JR大宮操車場の広大な跡地に官公庁の出先機関や民間企業、そしてホールや大規模商業施設が集積する地区である。そこにひねりの入った形状の高層ビルO-miyaスパイラルが建築されることになる。ちょうどスウェーデンのマルメのランドマークになっている「ターニング・トルソ」⁵⁾を彷彿とさせる。吉田修一は作中で「スイス・リビルディング」⁶⁾を想定していることを明らかにしている(吉田, 2004, 34)。

物語はそのO-miyaスパイラルという建築に関わる設計者側の犬飼と、現場側の隼人の交互の語りによって進む。ただこのふたりに接点はない。やがてそれぞれの展開があり、そのビルで隼人の同僚の季節労働者がひとり自殺をするという流れである。本稿では小説の内容には触れることはしない。ただ都市の記述に注目していくだけだ。順に都市の描写を追ってみよう。

「パチンコ店「Kingdom」⁷⁾は、大宮駅西口そごう裏の、いつか再開発されるのをまちわびているような、広大な空き地の真ん中に立っている。」(吉田, 2004, 3)

大宮駅西口は1986年に埼玉県などが中心になって建設したソニックシティがある。ホールやホテルを併設した複合施設だが、再開発にありがちな周辺開発が遅滞している。歩いて見るとよくわかるが、意外と空き地も散見できる。駅からソニックシティまでは都会然としているが、まだ未開発の部分も多いということである。

この界限は戦後、長らく不法占拠者のトタン波板葺きの民家が軒を連ね、かつては裏口的な存在であった。当時のこの界限の象徴的な建造物は、大宮商工会館でバス停

3) 海外での文化地理学のアプローチも増えてきており、中でもハーヴェイ(2006)は近代を産みだし断絶の神話を作ったとされるパリ・コミュニケーションを中心に、断絶がどのような連続のなかで実現したかを、経済・社会・地理・都市計画・文学・芸術という様々な領域を利用して検証したものであり、地理学の新しい展開を垣間見せてくれる。

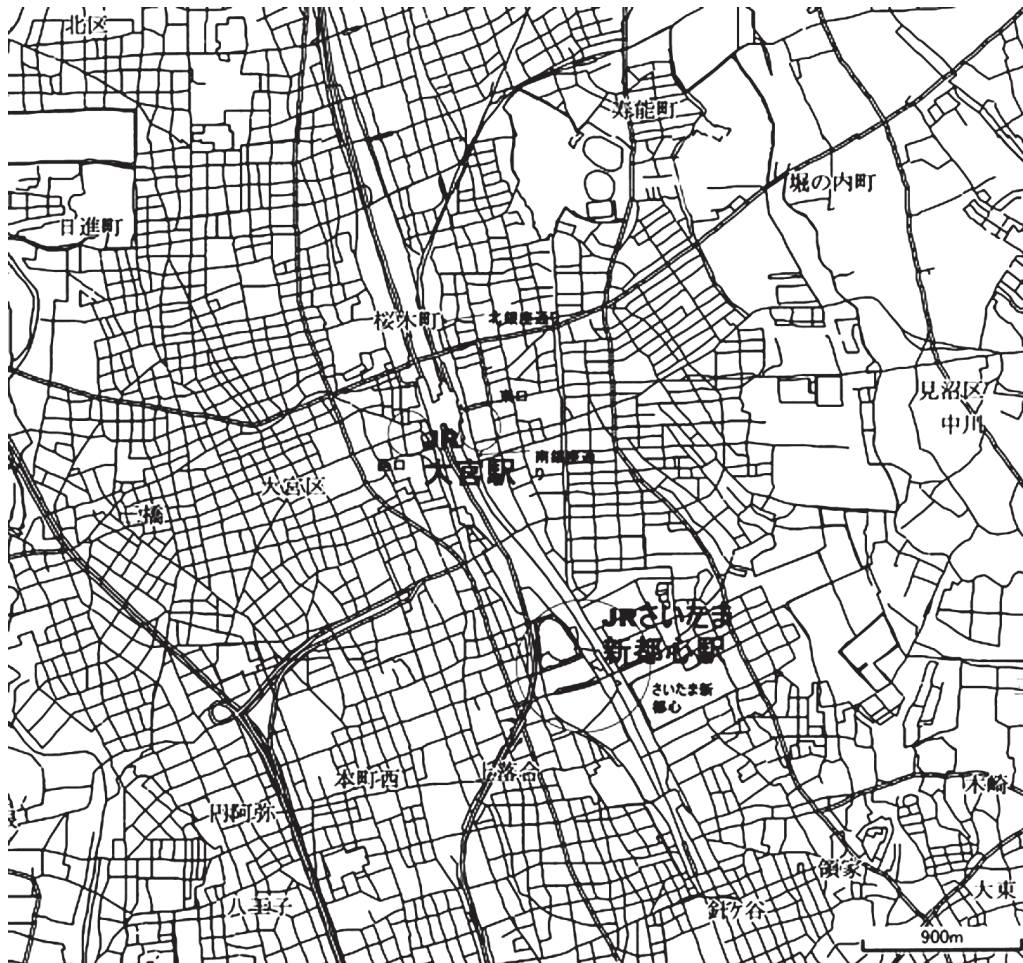
4) 2003年に旧浦和市、旧大宮市、旧与野市が合併して誕生した政令指定都市、当初は「埼玉You&I計画」によって上尾市、伊奈町も合併対象になっていたが、最終的には上記の3市で合併、2005年に岩槻市を編入、現在10区で構成、人口は約118万人。大宮区は旧大宮市の中心部に当たる。人口は約11万人。

5) 2005年に竣工、54階建て、193m。サンティアゴ・カラトラヴァンの設計になる。最上階は一階に対して90度のねじれを持つ。

6) 「スイスRe社ビル」と呼称されることも多い。「ガーキン(ピクルスのきゅうり)」と通称されるとおりの形で、全面ガラス張りのユニークな高層ビルで、ノーマン・フォスターの設計になる。

7) 実在するパチンコパーラー「HAP'S 1 Kingdom」のことだろう。埼玉県を基盤にしたチェーン店である。

[図 1] さいたま市大宮区概略図（筆者作成）



もここにあり、人々は駅から歩くことを余儀なくされていた。

また二ツ宮に埼玉県警運転免許試験場（現在は鴻巣市に移転）があり、運転免許取得関係の事業所が集積を見せていたという記録も残っている。つまり西口は1980年代の再開発までは明らかに旧態依然とした駅裏口的性格を有していたと推測できる。

「巨大ターミナル駅のコンコースには、まるで渋谷や新宿のいいところだけをピックアップしたように、「そごう」「高島屋」「ルミネ」「丸井」などのデパートの看板が並び、どの店舗にも「GAP」「ゴディバ」「ロクシタン」などの有名ブランドが入っている。」（吉田, 2004, 12）

吉田が記述するように「そごう」「丸井」は西口にあり、「ルミネ」は駅ビルの中にある。「ルミネ1」は東口、「ルミネ2」は西口に位置する。西口でいえば「アルシェ⁸⁾」「DOM」などの複合ビルも多く目立ち、これらは駅とペDESTリアンデッキで結ばれている。テレビ中継などで

大宮駅前が映される際は、現在ではこの西口デッキ上であることが多い。西口再開発以前は東口駅舎を映すことがほとんどであった。そういう意味では西口が対外的な大宮駅の顔になっていると思われる。

交通の要衝として大宮駅は駅の利用客が多いので、当然の展開といえるのだが、最近では東京近郊の駅には大なり小なり大規模商業施設が駅ビル、駅周辺に存在する。均等化、均質化の流れは個々の駅及び周辺をも巻き込んでいっている。大宮駅に見られるように東京と同じ物を消費者が購入できるような店舗を用意することも常套手段になりつつある。

2005年には駅改札内に新しい商業施設「エキュート」も誕生、更に大宮駅は商業施設としての機能を充実させている。

「駐車場を裏口から出た。そこから大宮駅西口から細い路地が続いている。駅周辺には、都内のどの駅とも同じように「らーめん日高」「海鮮問屋」「めんめん」「紅亭」

8) FM局NACK5のサテライトスタジオがある。NACK5の本社は浦和区常盤にある。

などの飲食店が入り乱れているのだが、それらの区域を取り囲むように、ここ大宮では「お茶の水ゼミナール」「栄光ゼミナール」「スクール 21」などの予備校や塾の看板が目につくようになる。」(吉田, 2004, 14)

交通の要衝は受験生をも受容していく。西口には「代々木ゼミナール」「駿台予備校」「城南予備校」「大宮予備校」⁹⁾などの大手予備校も集っていて、さいたま市以外の、例えば埼玉県北部や栃木県南部、群馬県南部からの受験生も多いと聞く。飲食店が散在する情景と予備校のアンバランスさがまた大宮駅西口の特徴といえるかもしれない。

発展する都市は都度、新たな機能を手に入れていく。予備校都市としての側面は西口再開発なしには考えられなかっただろう。東口にも「河合塾」「早稲田ゼミナール」などがあるものの、やはり再開発に伴う土地の造成があつてこそその結果だ。さいたま市内の機能分化としては文化・教育は浦和区の役割だったのだが、幾分様変わりしていると見て取れなくもない。

「もともと、80年代初頭の旧国鉄大宮操車場廃止を機に動き出した巨大大事業の動きがあつた。90年代にはさいたま新都心建設促進協議会が発足し、大宮の南、浦和の北に当たる広大な敷地に「さいたまスーパーアリーナ」や高層官庁ビル群が建ち始める。その流れを汲んで再開発されるのが、このO-miya スパイラルの立つ地域で、もちろんある程度の制約は課せられるが、その反面、税制面、補助金などではかなり有利なものとなっている。」(吉田, 2004, 57)

従来の商業地であつた大宮駅東口に対しての、新しい顔として西口が位置付けられている。受験生もさることながら東口に比べて西口の方が若年層が多く徘徊しているように見える。しかし、さいたま新都心は更に別の意味での新しい顔である。駐車場も広いのでどちらかといえば家族客を中心に商業施設は考えているように見える。

特にかつての片倉工業跡地¹⁰⁾に建設された複合商業施設「COCOON」にそれは象徴される。営業面積は23,500平方メートル、商圈人口は5km圏内及び鉄道で30分圏内の200万人を設定している。「COCOON」も他の大規模商業施設に多く見られるようにシネマコンプレックスが併設され、家族客を意識していることがそこにも伺われる。

「こずえの実家は、大宮駅から車で十分ほど走ったと

ころにある。産業道路と第二産業道路に囲まれた地域で、中途半端に区画整理された通りには、三十年前には新興住宅地と呼ばれていたのだろうが、今ではすっかり古ぼけた時代遅れのマイホームが並んでいる。」(吉田, 2004, 79)

大宮駅から車で10分ほどの距離には古い住宅街が多い。描写からおそらく天沼町、堀の内町辺り¹¹⁾が想起される。第二産業道路寄り(埼玉県道1号川口大宮線)にはまだところどころに畑や果樹園なども散見できる。つまり田舎然とした佇まいである。住宅は築年月の比較的古い建物が並び、その中に新築の中層マンションが建てられている。郊外の、また郊外といえるだろうか。産業道路(埼玉県道35号川口上尾線)や第二産業道路沿いにはロードサイド店が並び、住民は比較的、車社会の中で生活しているという一端も伺える¹²⁾。

「この辺りの景観の変化は、急激だと犬飼は思う。たとえば通り沿いに世田谷辺りに建っているような豪華なマンションがあるかと思えば、一つ信号を超えただけで、とつぜん見晴らしの良い畑になる。交差点には「ダイエー」「マルエツ」「マクドナルド」といった大きな看板が立ててあるのだが、バスに乗車してすでに数十分、通り沿いにそれら店舗を見かけることはない。」(吉田, 2004, 82)

O-miya スパイラルはさいたま新都心の計画を受けて建築されたという設定になっているが、新都心地区からは少し離れているようだ。犬飼は現場事務所からさいたま新都心駅までバスで向う。沿線はこずえの家のある地区よりまだ開発の途中にあるのだろう。急激に景観は変化する。もともとが田畑である以上、開発の過程では避けられない現象である。

このような景観は首都圏郊外には限りなく存在する。果たして都心部もそうだが、開発はいつまで続くのだろう。その速度はバブル経済破綻後には幾分落ちかけたが、近年ではまた新たに加速度がついたといえよう。住民の意思を無視したかのようにビルは次々に建てられていく¹³⁾。

「隼人は階段を昇り降りする群れのなかに政和がいなのを確認すると、視線を駅前の商店街に転じた。右手にバスのロータリーがあり、「浦和駅行き」「岩槻駅行き」などのバスが発車時刻を待っている。ソニックシティができた西口とは違い、こちら東口のほうはまだ本格的な再開発がされておらず、駅前から伸びるすずらん

9) 唯一の地元資本の大手予備校、池袋、柏、春日部、川越、所沢にもブランチ展開をしている。

10) 後に触れるが、片倉工業は明治初頭に現在の長野県岡谷市で創業、絹を中心にした製糸、紡績で実績を挙げる。本社は東京都中央区京橋、1967年、大宮工場の敷地内にゴルフ練習場開設、これは開発事業部門の嚆矢となる。

11) 天沼町は大宮消防局や自治医大病院があり、堀の内町は大宮第二、第三公園がある住宅地区である。

12) 一般的には貨物輸送の交通に供される道路の総称。主に高度経済成長期に企業誘致を目的として、自治体が道路構造令に基付き整備した路線が多い。

13) 2006年東京都地価調査に基づく首都圏の地価状況は、郊外部では、都下の圏域内の大半の市町並びに川崎市、横浜市、千葉市、柏市、さいたま市、川崎市及び都心とこれらをつなぐ鉄道沿線のほぼすべての地域では、平均で上昇となった。しかしこれらの地域以外では依然として下落している地点が多く、圏域全体では、4割以上の地点が下落している。

通りや大宮銀座通りには、低層の雑居ビルが立ち並び、大小さまざまな店舗のカラフルな看板が、まるで紙吹雪のように通りを覆っている。マクドナルド、マツモトキヨシ、ロッテリア、みずほ銀行、松屋、てんや…」（吉田, 2004, 113）

東口の描写である。雑然とした風景が浮かんでくる。実際には東口は更に機能分化しており、大宮銀座通りの反対側には県内最大の飲食店、娯楽施設の集積する繁華街、大宮南銀座通りがあり、大宮銀座通りの先、大栄橋の北側には特殊浴場などの風俗営業店が立ち並ぶ大宮北銀座通りがある。歴史が古く、すでに開発し尽くされていて、新しい建物は少ない。古い建物に新しいテナントが入ることも珍しくない¹⁴⁾。旧大宮市時代には再開発計画があったが、地元商店街と行政の間の合意形成が難航し、凍結された。合併後、正式に白紙撤回された。

一方で、合併後には長崎屋など百貨店 3 店舗が相次いで閉業するなど、西口と比較して地盤沈下の傾向が顕著に現れている。大宮南銀座通り界限には老舗映画館が林立していたが、郊外型大規模店舗の開業や、さいたま新都心の整備によって開館したシネマコンプレックスによって、すべて閉館に追い込まれた¹⁵⁾。

「なぜかしら、自分が今、東京からひどく離れた場所にいるのだと、強く感じた。するととつぜん東京を中心にした関東大地図が目の前に現れ、まるで東京だけぽっかりと穴があいたような、ドーナツ状の帯が浮かぶ。それが何を表した地図なのか分からない。ただ、東京だけが何かから隔離されていて、いや、何かから守られていることだけが伝わってくる。」（吉田, 2004, 130）

東京への一極集中が地方との格差を生んでいるといわれる。しかしさいたま市の位置も微妙である。経済の循環に一定の活力は見られるが、やはり東京との比較はできない。ただ東京 30km 圏内、つまり国道 16 号線から内側までがぎりぎり現在の好景気を享受する限界になっているのかもしれない¹⁶⁾。

例えば宇都宮市や前橋市などの 100km 圏の諸都市では経済状況は好転しているわけではない。それは中心商業地区の衰退に顕著であろう。全国の地方都市同様にシャッターを閉めた商店が目立ち、若年層の東京への流出もそれぞれが抱える問題になっている。

郊外型の大規模小売店がモータリゼーションの時代にマッチングしたことが第一に挙げられるが、中心商業地区の衰退は住民や旅行者にも暗い印象を与える。そこには東京とは隔絶した地域社会、経済がある。残念ながら

東京だけが吉田が記述するように何かから守られていることを否定することはできない。

「一巡した CD が同じ曲を流している。河川敷に広がる駐車場はカーセックスのスポットでもあるらしく、隼人たちの車のほかにも数台がきちんと間隔をあけて停車している。

隼人はカーステレオのボリュームを更に上げると、タバコに火をつけてシートを倒した。窓の向こうの夜空に、星がはっきり見える。」（吉田, 2004, 187）

秋が瀬公園はさいたま市桜区にある荒川河川敷の公園である。埼玉県営の都市公園である。広大な敷地に野球場、ラグビー場などの運動施設も充実している公園だが、駐車場では吉田の描写のような光景が広がっている。しかしそれは秋が瀬公園に限ったことではないだろう。首都圏近郊の同様の場所に共通する光景である。

現代の若年層のカップルの夜の楽しみ方のひとつなのだろう。もしかすると全国的に共通の行動様式になっているのかもしれない。お台場や大黒埠頭、幕張などの海岸の駐車場にも同様の光景が散見される。都市はそういう装置をも用意している。そしてそれは都市空間の変容とともに移り変わってもいくのだろう。

「さいたま新都心西出口の看板が現れて、まるで車が夜空に飛び立っていくように、道が上向きに傾斜する。実際、道の向こうには、夜空しかない。このままアクセルを踏み込めば、間違いなく夜空へ吸い込まれる。

しかし夜空に吸い込まれる直前で、道は大きくカーブする。傾斜が下向きになり、景色が反転するように、大宮の夜景が底に広がる。そのなかに、まだ小さくだが、工事中の 0-miya スパイラルの姿も見える。明かりのついていないビルは、夜空を背景に、ぼんやりとその輪郭だけを浮かび上がらせている。」（吉田, 2004, 202）

『ランドマーク』は季節労働者の自殺の報を受けて、犬飼が大宮に向かうところで終る。高速で大宮に入る手前の夜景は印象的だ。突然、高層ビルやマンション群が視界の中に現れ、まるで近未来の予感すら与えてくれる。

3. さいたま新都心

1988 年に大都市地域の秩序ある整備促進を目指して、多極分散型国土形成促進法が施行され、翌年にさいたま新都心への政府機関の移転が決定される。1991 年に着工され、街区の整備も行われた。2000 年に大手町、霞ヶ

14) 大宮ロフトが代表例である。

15) 映画館 3 軒を営業していた「ハタブラザ」が 2006 年に閉館。

16) 自治体の財政は逼迫の状況にある。さいたま市はこれまで鉄道、道路が整備され企業の収益も比較的良好だったが、今後の少子高齢化は新たな大きな問題になってきている。

関の各省庁からさいたま新都心の合同庁舎、郵政庁舎への移転が開始され、同年 JR さいたま新都心駅が開業した。

同時期にさいたまスーパーアリーナ、簡易保険加入者福祉施設「ラフレさいたま」、けやきひろばのショップ & レストランが開店、以降、NTT ドコモさいたまビル、明治生命さいたま新都心ビル¹⁷⁾、NTT 東日本さいたま新都心ビル、ショッピングモール「COCOON 新都心」が開業、2003 年には浦和、大宮、与野の 3 市が合併し政令指定都市に昇格した（図 2）。

多極分散型国土形成促進法というのは、高度経済成長によつての首都圏への人口、資本の集中の是正のための施策であった。1986 年に策定された「第 4 次首都圏基本計画法」によつて、千葉、横浜・川崎、浦和・大宮などの 11 ヶ所を業務核都市として位置付けた。

ここで旧国鉄大宮操車場跡地が注目されてくる。跡地面積は約 27ha、その約 55%が旧大宮市、約 38%が旧与野市、約 7%が旧浦和市に属していた。「第 4 次首都圏基本計画」ではこの大宮操車場跡地を整備地区と位置付け、先述したように 1989 年に政府機関の移転が決定した。合わせて埼玉県は政府機関の移転を含め、操車場跡

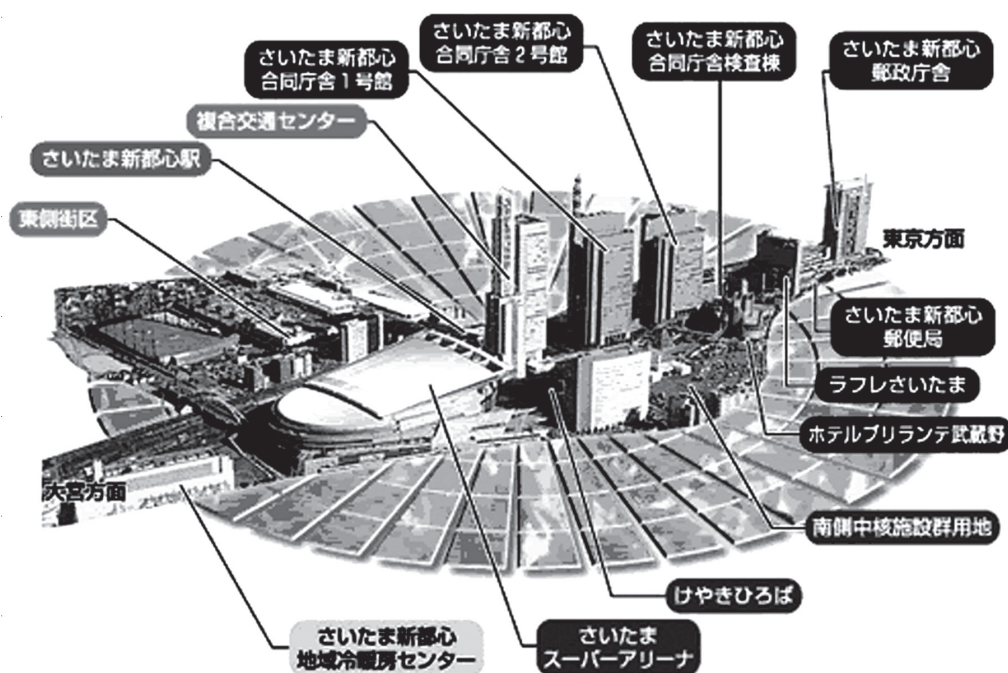
地を中心とする新都心整備の基本計画を策定した。

この基本計画は「さいたま新都心拠点整備事業」として操車場跡地を含め、265ha を整備する広大なものだった。まず新都心へのアクセスを確保するために首都高速道路の延伸、JR 新駅（さいたま新都心駅）の建設、周辺道路の拡幅等の整備が計画され、新都心地区の整備の目標は、計画区域が操車場跡地と新駅の東側を含めた 47.44ha、就業人口約 5 万 7 千人、延べ床面積約 180 万平方メートルの新しいまちをつくることにあった（図 3）。

埼玉県は「さいたま新都心拠点整備事業」の目標として、「自立性の高い都市圏の実現」、「首都機能の一翼を担う」、「埼玉の辻を作る」という三点を掲げたが、現実的には当初、盛り込まれた先端的図書館機能を備えた情報センター、国内外の会議に対応した会議場、実演・展示のための建造空間、都市ホテル¹⁸⁾、業務施設などを複合した「埼玉メッセ」が着工の目処すら立っていない、また集客装置として期待された「さいたまスーパーアリーナ」¹⁹⁾も稼働率は 50% を割っている状況で、JR 新駅東口の商業施設に賑わいはあるものの、それ以外は平日は特に閑散とした印象である。

就業人口も目標には到底、達せずに精々 1 万人程度の

〔図 2〕 さいたま新都心概観（www.saitama-ritti.com）



17) 2004 年の明治生命と安田生命との合併により、明治安田生命新都心ビルと名称が変更された。別名ランドアクシスタワーという。

18) JR 東日本が計画していた。

19) 多目的ホール、第三セクターが運営。ステージ使用の場合、3 万人収容できる。館内にはジョン・レノンミュージアムも併設されている。

増加があった程度であり、決して計画通りに推移しているわけではない。事業が計画された時期がバブル経済期に当たり、その時期はちょうど全国各地で大規模再開発が計画された時期であった。例えば横浜市では「みなとみらい 21」、千葉市では「幕張副都心」の計画が進められており、前者は開発面積 186ha、就業人口 19 万人、後者は開発面積 522ha、就業人口 15 万人と設定、両者ともに臨海部という立地条件の優位性があった。さいたま新都心はそれに比べると核になる開発面積も狭く、また内陸部に位置するという弱点もあった。

また計画された時期も「みなとみらい 21」、「幕張新都心」に比べると計画自体が遅れ、事業として具体化するのにはバブル経済が崩壊してからになるという不運もついて廻った。更にすでに商業の中心地である大宮、行政・文化の中心地である浦和といった機能分化が成立している地域での意味付けも難しかったのかもしれない。

現在では住宅地の都心回帰というような現象が起きており、都心部から 30km の距離にあるこのさいたま新都心に定住人口を集めるのも困難になってきており、計画自体を住民の意見を取り入れた形で再構築することが望まれている。最後の期待を集めていた「さいたまタワー」の計画も東京タワーの次世代が墨田区に決まった以上、当然のことといえるだろう²⁰⁾。

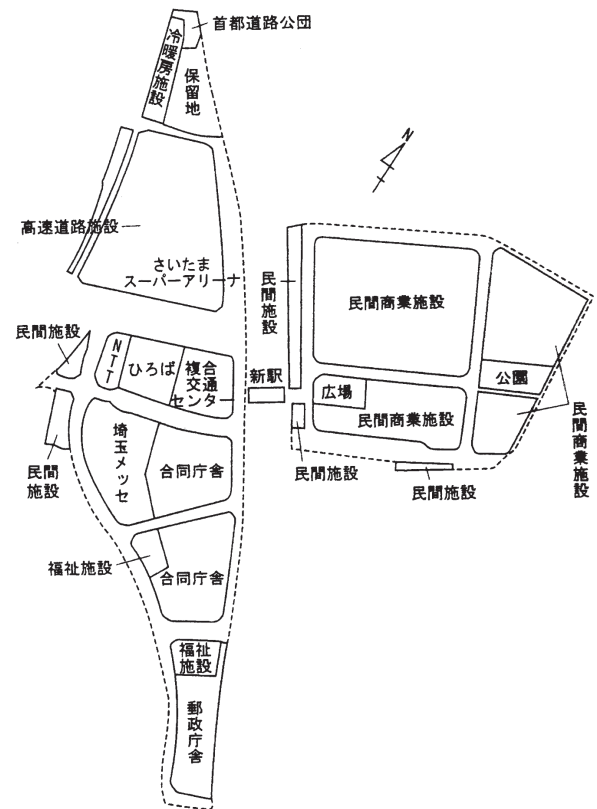
さいたま市の人口は約 118 万人（2007. 3. 31 現在）、全国で 10 番目の人口規模を有している。基本的に旧浦和市が政治的な中心地になっており、旧大宮市は交通、商業の拠点としての性格を有している。合併前からの機能分化が依然として残っているといえよう。

大宮は古代から武蔵一ノ宮といわれた氷川神社の門前町として発達し、江戸時代に中仙道大宮宿が置かれる。しかし近代都市としての性格を決定付けたのは 1985 年の日本鉄道（現 JR 東北本線）の開通に伴って、高崎線との分岐点に大宮駅が開業したことだろう。また 1932 年には赤羽－大宮間の省線電車（現 JR 京浜東北線）の開通、翌年の板橋－大宮間に国道 17 号線が開通したことによって、郊外住宅地化が進展する。

産業的には明治期には製糸業、綿織物業が工業の中心だったが、交通の要地となったことで、国鉄大宮工場以外にも光学機器や自動車関連部品の製造工場も立地を始め、やがてそれは軍需産業の進出へと繋がっていく。

その後、周辺町村との合併を繰り返し、人口規模を拡大、1940 年に人口約 6 万人の大宮市になる。まずは交通の要地としての比較優位性が商業都市への展開も促したといえよう。その後も 1982 年に東北新幹線大宮駅の

〔図 3〕さいたま新都心計画図（1994、埼玉県）



開業によって、その傾向は一層強まる。現在では新幹線 5 路線を含む鉄道 12 路線が乗り入れ、一日の乗降客数が約 60 万人に上る交通の要衝になっている。

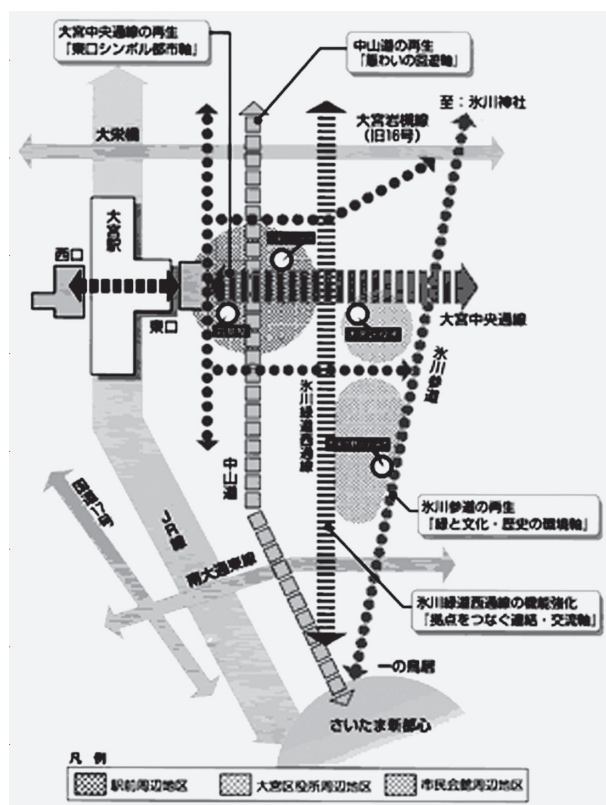
従来は駅東口が氷川神社、中仙道があり、また旧大宮市役所など公共機関の集積もあり、商業的な中心地だったが、1980 年代に木造家屋が密集する住宅地だった西口を開発の動きが生じ、駅前広場や歩行者デッキなどの基盤整備が行われ、ソニックシティ、そごうなどのビルが建設され、2006 年には複合施設シーノ大宮²¹⁾が竣工した。

コントラストとしては雑然とした昭和の名残を残す東口と近代的に整備された西口との対比が注目されるが、そこにさいたま新都心が登場したのである。吉田がこの地区に注目したことにも彼なりの意図があるに違いない。ただし東口も今後はさいたま新都心との連関を視野に入れた再開発計画も進捗し始めていることには留意していくべきであろう。東口の再開発は「複合交通拠点及び駅前の整備」、「氷川緑道西通線の整備」などが中心に考えられている（図 4）。

20) 高さ約 610 メートル、敷地面積は約 8100 平方メートル。地上 450 メートルの展望施設のほか、商業施設などを作る計画。建設の候補地は、言問通り、押上通り、東武鉄道伊勢崎線、北十間川に囲まれた約 6.4 ヘクタールの区域。

21) 共有広場であるアトリウムを含め 5 棟の建築物からなる。ソニックシティの西側に当たる。

[図4] 大宮駅東口再開発構想図 (www.saitama-ritti.com)



4. 川本三郎『言葉のなかに風景が立ち上がる』

川本三郎もこれまで数多くのアプローチで文芸、映画、都市を論じてきた。2006年に出版された『言葉のなかに風景が立ち上がる』はいわば文芸風景論といえようだろうか。彼はこの領域ではこれまでに幾つもの著作を残している。

1990年の『大正幻影』では大正期の文学と墨田川の風景との関係性、1996年の『荷風と東京』では荷風という作家と東京という都市風景との関わりに注目、2003年の『郊外の文学誌』では関東大震災の後、東京の郊外住宅地から生まれた文学作品を、2003年『林芙美子の昭和』では彼女が生きたモダン都市東京を論じてきた。

彼は奥野健男『文学における原風景 原っぱ・洞窟の郷愁』²²⁾、磯田光一『思想としての東京 近代文学史ノート』²³⁾、前掲の前田愛『都市空間の中の文学』に影響を受けてきたと述べる。

「風景に心惹かれる。ときに人間の営みそのものよ

りも、背景になっている風景のほうに惹かれる」(川本, 2006, 7) と彼は冒頭に述べ、更に「絵画や映画のような視覚による芸術と、言葉による文学とでは、風景の描き方が違う。言葉によるほうがはるかに困難を強いられるのではないか」(川本, 2006, 17) というように文学のテキストとしての性格を分析する。

『言葉のなかに風景が立ち上がる』は比較的現代の作家を扱っているが、吉田修一『ランドマーク』も取り上げられている。タイトルは「高層ビル不安と恍惚」である。川本は最初に主人公のひとり隼人の台詞を挙げる。「ここ大宮にすでに二年以上住んでいる。住民票も移し、税金も払い、立派なさいたま市民であるはずなのに、一度もこの街を自分の街だと思ったことがない」(吉田, 2004, 114)。

そして彼自身の意見を述べる。「その街に現実に住んでいながら、一度も自分の街だと思ったことがない。故郷でないからというのではないだろう。おそらく故郷に対しても、もう自分の街だとは思えなくなっている。どこに住んでいても、自分の居場所がない。都市のなかを浮遊して生きていくしかない」(川本, 2006, 118)

都市空間の急速な変容は住民のアイデンティティを確立するのが難しい。川本が『ランドマーク』を取り上げた背景にもそういった思いがある。いわゆる副都心、新都心と称せられる地域に共通する現象だろう。戦後の日本はそういった手法をとって地域開発を行ってきた。古い風景を破壊することが一種の美德であったのだろうか。

都市開発によって生まれた新しい都市空間は魅力的に映る。確かに絶えず東京都心部で行われている大規模都市開発も同じ文脈にある。しかし住民が原風景に抱いていた思いはそこでは無視されることになる。あくまでも経済優先の施策展開が常だったこの国は未だにその施策の手を緩めてはいない。

「再開発が宿命付けられている都市では、新しいものがたちまち古ぼける。かつての鉄道の操車場が再開発によって近未来的な新しい都市になる」(川本, 2006, 122) と述べているように、実際にその変貌振りを目を見張るものがある。さいたま新都心は忽然とできた近未来都市と表現できるだろう。

さいたま新都心は1970年代のニュータウンとも違う側面を有している。つまり跡地利用という1990年代以降に着手された再開発方法のひとつのアプローチである²⁴⁾。ただその規模が明らかに大規模だということで、周辺への影響も少なくはない。また地域住民は「一方では、人

22) 1926年生まれ、文芸評論家であるとともに化学研究者としての一面も持つ。1960年代前半に、「政治と文学」というプロレタリア文学以来の観念を厳しく批判し、民主主義文学を否定したことで、文学論争の主役となった。

23) 1931年生まれ、文芸評論家。三島文学を日本の土着性の中であらえ直そうとした『殉教の美学』、英文学と高見順を対比させて転向の問題を論じた『比較転向論序説』、小林秀雄などを論じた『パトスの神話』『吉本隆明論』『戦後史の空間』など西化と日本の伝統の両面から広く時代背景をとらえた文芸評論を発表し続けた。

間の日常的な身体感覚を遥かに超えてしまった都市風景に不安を覚えながら、他方では、これまで経験したことがなかった景観に魅了される。近過去の風景と、現代の風景が混在するなかで、彼は、近過去の感覚と現代の感覚に引き裂かれていく。」(川本, 2006, 125) というような感覚に陥るのだろうか。

川本が『ランドマーク』のような作品を取り上げるのは珍しいことであるが、しかし跡地利用による再開発が全国各地で生じている現在においては様々な角度から精査して見ていく必要もある。特に東京周縁部での動きは地域経済や社会に与える影響を注視することが重要である。

絵画や映画のような視覚による芸術作品と、言葉による文学作品ではテキスト分析というアプローチからしても後者は圧倒的に困難な作業を伴うことになる。しかしその都市の空間の奥行きと広がりを見ていく上では、また文学作品のテキストとしての有用性には改めて注目すべきなのかもしれない。

川本も指摘しているように『ランドマーク』は首都圏郊外の都市と人々の関わりを描きながら、しかし言外に東京一極集中の現状をシニカルに見ている。筆者が『ランドマーク』の中でもっとも注目するのは隼人とこずえの母親の次のやり取りである。

「大宮に予備校が多いのは、ここから出て行きたがって子供たちが多いからなんだってさ」とつぜんおばさんが話を変えて、新しいビールの缶を開ける。隼人はその前に自分のグラスを突き出しながら、「なんでここから出ていきたいんだよ?」と訊いた。

「そりゃ、すぐ近くに東京っていうもっといいところがあるんだから、若い人はそっちに行きたいんじゃないの? そりゃ、あんたみたいに九州のド田舎で生まれりゃ、ちょっと難しい話だけど、大宮ならそれこそ日帰りで行けんだし」

「だったら、ここにいたっていいんじゃないの?」

「行くといえるじゃ大違いだろうよ。若い人ってのは、東京に行きたいんじゃないで、いたいんじゃないの?」(吉田, 2004, 116)

隼人が作中で大宮駅東口の店や産業道路沿いのロードサイド店の幾つかの名前を挙げ、行ったことはないが、内装は思い出せると述べる件がある。つまり大宮も部分的な東京のコピーを受容しているのである。しかしそれはあくまで部分的にであって東京のダイナミズムに敵う由もない。

地域の文化を破壊、駆逐しながら日本の都市は東京の

部分的複製都市になっていく。この点に疑問を抱く人々も少なくはないに違いない。全国的な均質化、均等化は個々の都市を今後、どういった形に導いていくのだろうか。中長期的な視座に立つての各階層での政策展開に関する議論を濃密に行っていく必要があるだろう。

5. 結語

吉田初三郎²⁵⁾という絵師がいる。地図収集家の間では「大正の広重」とも呼ばれている。都市鳥瞰図が有名である。吉田修一の作品世界は「鳥瞰図」的な情景描写と評されることが多い。確かに『パークライフ』、『東京湾景』、『長崎乱楽坂』、『7月24日通り』にもその傾向は伺われる。2007年4月に出版された『悪人』も見事な福岡、長崎の都市描写を見せている。

吉田初三郎は生涯に1,600点を越える作品を残したといわれている。初三郎の作品は、中央部を細かく描写する一方で、左右の端をU字型に曲げて、実際は見えない遠景をパノラマ風に描くところに特徴がある。彼は当時、別府・亀の井ホテル社長であった油屋熊八と出会うことによって「観光」という文脈を意識した鳥瞰図作成を行う。

彼は第二次世界大戦前にその地図作家としての隆盛を迎える。当時のメディア状況からすれば、彼の手になるビジュアル世界は人々に多大な夢を与えただろう。現在においても十分に魅力的ですらある。デフォルメされた地図はリアリティと同時にファンタステックでもある。

1934年に描かれた『帝都郊外唯一の理想郷 大宮鳥瞰図』は氷川神社を中心にデフォルメを加えたものである。まだ小都市然とした大宮を描いたその地図は吉田修一の視点を髣髴とさせる。駅やその周辺の商店やそこから広がる住宅地も一軒一軒丁寧に描かれ、都市空間を十分に把握できるものになっている²⁶⁾。

都市は変容する。そして地図はもとより小説などの文学作品もその変容をテキスト化している。今後も作者の関心を含めて、都市個々の問題の所在を読み込んでいく必要があるに違いない。『ランドマーク』に描かれた都市変容は大きな示唆を与えてくれる。都市の再開発が依然として闇雲に行われているような思いを持つのは筆者だけではないだろう。

そこに住民との合意形成がきっちりと成されているのか、中長期的に見てその再開発は有効なのか、都市を扱った文学作品のテキスト分析を通じて考えていく必要もまたあるに違いない。

24) 最近では川口市のサッポロビール工場跡地にできた複合商業施設「Ario 川口」や川崎市の東芝工場跡地にできた複合商業施設「ラゾーナ川崎」などが挙げられる。

25) 1884年生まれ、尋常小学校を卒業するとすぐに友禅図案師の元で丁稚奉公に就き、ついで京都三越図案部で職工として勤める。その後、軍隊に行き除隊後、本格的に美術の勉強を始める。関西美術院長、鹿子木孟郎の元での洋画修行からデザイナーとして一步を踏み出すことになる。

26) 吉田初三郎は1921年に京都で大正名所図絵社を設立、多くの門弟を抱え工房方式での制作体制を築く。

〔参考文献〕

- Asahi.com (2006) 『マイタウンさいたま (10/26)』, 朝日新聞社.
- 今橋映子 (1993) 『異都憧憬 日本人のパリ』, 柏書房.
- 大宮市編 (1980) 『大宮のむかしといま』, 大宮市.
- 内海達哉 (2006) 「さいたま新都心の形成とまちづくり」, (所収 和田明子, 浅野俊雄, 内海達哉, 大野新, 笹川耕太郎, 福田行高 (2006) 『地域を調べ 地域に学ぶー持続可能な地域社会をめざしてー』, 大明堂.)
- 川本三郎 (1996) 『荷風と東京『断腸亭日乗』私註』, 都市出版.
- 川本三郎 (1997) 『東京つれづれ草』, 三省堂.
- 川本三郎 (2006) 『風景の中に言葉が立ち上がる』, 新潮社.
- 埼玉県 (1993) 『埼玉中枢都市圏業務核都市構想』, 埼玉県.
- 埼玉県 (1994) 「さいたま新都心中枢・中核施設整備基本計画」, 埼玉県.
- 陣内秀信 (1985) 『東京の空間人類学』, 筑摩書房.
- 高山宏, 堀淳一, 藤本和美, 石原正, 村松昭, 友利宇景 (2001) 『鳥瞰図絵師の眼』, INAX 出版.
- 羽仁五郎 (1968) 『都市の論理』, 勁草書房.
- 舟越健之輔 (2001) 『100 万都市誕生 さいたま市はどこへ行く』, 東京新聞出版局.
- 別冊太陽 (2002) 『大正・昭和の鳥瞰図師 吉田初三郎のパノラマ地図』, 平凡社.
- 前田 愛 (1982) 『都市空間の中の文学』, 筑摩書房.
- 前田 愛 (1993) 『文学テキスト入門増補版』, 筑摩書房.
- 吉田修一 (2002) 『パークライフ』, 文藝春秋.
- 吉田修一 (2003) 『東京湾景』, 新潮社.
- 吉田修一 (2004) 『長崎乱楽坂』, 新潮社.
- 吉田修一 (2004) 『ランドマーク』, 講談社.
- 吉田修一 (2007) 『悪人』, 朝日新聞社出版局.
- 吉見俊哉 (1987) 『都市のドラマトゥルギー』, 弘文堂.
- 若林幹夫 (2005) 「都市論の系譜」, (所収 『tokyo studies』, 紀伊国屋書店)
- 和田博文 (1999) 『テキストのモダン都市』, 風媒社.
- Harvey, D., 2003, Paris, Capital of Modernity, Routledge. (大城直樹, 遠城明雄 (2006) 『パリーモダニティの首都』, 青土社)